



大阪東ブロック 枚方・寝屋川・交野支部
 (株)岡崎金型工作所 岡崎 耕治

「古事記」や「日本書紀」などの古い文献に登場する「ひらかた」。平安時代には平地部で鷹狩りをしたり、山間部では桜狩りなども行われたと「伊勢物語」に記されています。江戸時代は交通の要所で、京都で終わる東海道五十三次を大阪まで延伸して五十六番目の宿場町として発展していきました。陸路はもちろんですが大阪京都間には大きな淀川があり、水路による行き来も頻繁に行われました。枚方の宿場町近辺では、小舟を使って餅やごんぼ汁（注・ごぼう汁）などを、三十石船の船客に商う舟が出されており、売り子の威勢のよい売り声から「くらわんか舟」と愛称され、淀川の風物詩として親しまれていました。「くらわんか」の語源については、枚方にあります関西外国語大学のページにわかりやすく描いてありますので一部抜粋します。「くらわんか舟」の起源については、徳川家康が大坂の役の際、摂州柱本の舟が兵糧米2万石を昼夜運び続けたことにより、淀川筋において食べ物売りの営業独占権を与え、その印として黒字に白の縦筋を染め抜いた川舟旗が与えられました。この旗の威光で、相手が身分ある武士であろうがなかろうが、上り下りの三十石船へ茶舟をこぎ寄せて船縁に舟をつなぎ止め、あん餅・ごんぼ汁・酒などを売る茶舟がありました。ただこれだけのことならどこにでもある光景でおもしろくはないですが「くらわんか舟」を一躍有名にしたのはその独特の売り声でした。「くらわんか」というのがそもそも河内や枚方地方の方言で「○○を食らわないか」「○○を食べませんか」という意味を持っているのです。「餅くらわんか、酒くらわんか、銭がないのでようくらわんか」と客をあざけり、眠っているのを手荒く起こす無作法が特権だったといえます。これがかえって旅人に人気があったようです。そこから「くらわんか舟」という俗称が生まれ、淀川の名物になりました。淀川を船で通った人々は「くらわんか舟」がよほど珍しかったのか、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』をはじめ、多くの文芸作品に記されています。その「くらわんか舟」で使われていた「くらわんか茶碗」はごんぼ汁などを入れる容器として使われ、この数によって何杯いくらと値が付けられていました。時々、食べ終わると淀川にこっそり捨てる人もいて、今でも川床から完全な形で砂に洗われた薄い呉須模様の「くらわんか茶碗」が出てくるのはその時のものであると言われてしています。現在では道路や鉄道が整備され「くらわんか舟」は姿を消しましたが、枚方では今でも語り継がれる歴史の1ページです。



～ここはどこぞと船頭衆に聞けば、ここは枚方鍵屋浦。鍵屋浦には錨はいらぬ、三味や太鼓で船とめる～。その昔、大坂冬の陣で真田幸村の軍勢に追われた徳川家康は、危ういところで淀川の舟に身を隠し、船頭さんに救われたとか。その功をもって商い御免のお墨付きを貰った「くらわんか舟」江戸時代の賑わいが目に浮かびます。（編集西岡）